

(対象事業：2. 教育普及手法の開発等の事業)

事業名：第10回みんなの展覧会をつくろう展

事業者名：リアス・アーク美術館

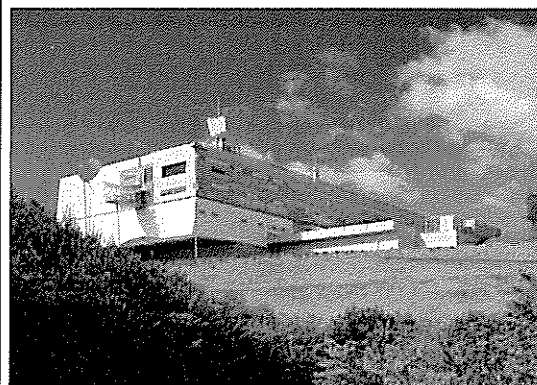
連携事業館名：特になし

住所：宮城県気仙沼市字赤岩牧沢138-5

TEL：0226-24-1611

FAX：0226-24-1448

HPアドレス：<http://homepage3.nifty.com/riasark/>



①施設概要

地域における文化創造活動の拠点施設として平成6年10月26日に開館した。宮城県が施設の整備を行い、1市4町で構成する広域組合で運営している。美術館は県から無償で借受けしていたが、開館から10年を迎える平成16年5月末に貸付期間終了となり、広域組合に無償譲与された。建物の設計は早稲田大学理工学部建築学科、石山修武研究室があたり、1995年の日本建築学会賞を受賞している。総面積は4,601㎡で、2つの展示室と常設展示室、個展等を開催するコモンホール、創作活動の場であるワークショップ、ハイビジョンギャラリーなどがある。年間約10本の企画展を開催している。

②事業の意図目的

気仙沼・本吉広域圏の小、中学校、高等学校を対象に児童生徒の表現活動の発表機会を提供すると同時に、学校教育と美術館教育の今後の関わり方を模索することを目的とする、公募展形式の展覧会。美術館の展覧会を開催している同じ場所に自分たちの作品が展示されることにより、美術館への親しみ、制作された美術作品全体の理解へとつながり、美術そのものに対する理解を深めることをねらいとする。

③事業概要

圏域内（1市5町、平成17年3月31日まで）の小、中学校、高等学校、全57校に作品応募について依頼をする。展覧会の構成は小学生部門、中学生部門、高校生部門と各部門にテーマを設け、応募された作品は全て展示する。各部門には、大賞、優秀賞、美術館館長賞を設け、会期中に表彰式と選評発表会を行う。

④事業の製作物及び報告書等

広報物 <ポスターB3版・チラシA4版両面・案内書・作品応募票>
印刷物 <入賞作品12作品図版入り年度カレンダー（選評入り）>
<出品者・出品作品目録>

⑤参加者状況

出品者数 377人 出品点数 384点
内 訳 小学生312点（22校） 中学生31点（6校） 高校生41点（6校）
展覧会への入場者数 1,296人（開館実日数22日間：一日平均58.9人）

(1) 事業の実施状況について

リアス・アーク美術館では東北のアイデンティティをひとつのキーワードに企画展を開催している。一方、常設展示では民俗資料展示コーナーと美術作品展示コーナーの2つに分け、「方舟日記―海と山を生きるリアスなくらし―」と題し、「食」を中心に当地の文化を紹介するとともに、開館以来、寄贈寄託された絵画、彫刻、写真等の美術作品を展示している。

「みんなの展覧会をつくろう」展は、当館の重点目標のひとつ、創作活動の発表の場を提供するという点から企画されたもので、気仙沼・本吉地域で暮らす小学生、中学生、高校生が授業時間以外で制作した作品を一堂に集め、お互いの作品を鑑賞できる場となっている。こうした「みんなの展覧会をつくろう」という表題のと通りの趣旨に基づき、平成7年度から毎年継続開催し、今回で節目の10回目を迎えた。

私達が日常生活の中で感じたり考えたり表現したりしていることは、美術館の展示室とはなんの縁もなさそうに思える。特に子供の目から見れば、学校で自分たちが体験している図工や美術というものと、美術館が扱う美術作品を同じ地平で結びつけることは容易なことではないかもしれない。しかし、いつも美術館の展覧会を開催している同じ場所に、自分たちの作品が展示されたらどうなるか。何かを表現し、それを伝えるという行為自体には何の違いもないことを感じる事ができるであろう。

自分以外の、または他校の児童生徒のみんながどんなものを見て、何を感じ、どんな風にそれを表現しているのか。一堂に会した学年、学校を越えた数多くの作品を目の前にし、お互いに感想を話し合う機会が生まれ、客観的な視点から自分と他人の比較が出来る場となっている。応募した作品が他校の生徒の作品と同一展示室に並ぶことでより客観的な視点で自分を見つめ直す機会となる。美術を通して自分の世界が広がって行く有意義な展覧会であろう。



第10回 会場風景

展覧会の構成は、それぞれの驚きや発見をのびのびと表現した「小学生部門」（テーマ：外にでよう！）、技術的にも一段成長し、観察したことや思いなどを様々な表現手法で描いた「中学生部門」（テーマ：ひと・まち・くらし）、豊かな発想と様々な媒体によって自由なテーマを表現した「高校生部門」（テーマ：自由）からなっている。高校生部門に関してはテーマを様々な形で表現できるよう、油彩・水彩・写真・立体など各自の的確な表現方法での応募とした。「えがきたい」という気持ちを一番と考え、応募された全ての作品を展示した。展示は全て館職員が行い、館内2室「圏域ギャラリー」・「企画展示室」を使用した大規模な展覧会となった。観覧者からの要望もあり、学校ごとの展示となった。

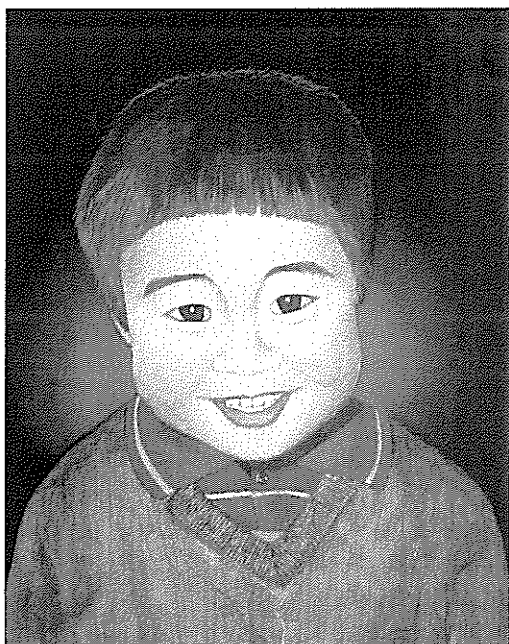
夏休み前に展覧会の通知と応募案内を学校に送付し、夏休み明けより作品の応募が徐々に増えた。応募締め切りの12月に小・中・高あわせて384点もの作品が集まり、昨年度よりも110点多い応募となった。特に中学生部門では前回2校・4点の応募が6校・34点と大幅に増加している。また、観覧者数も昨年よりも234人多い、1,296人となった。



表彰式の様子

当館学芸員による厳正な審査の結果、応募された作品の中から優秀賞4点、美術館長賞8点が選出され、2月19日に当館ハイビジョンギャラリーにて入賞者表彰式が開催された。式では各賞に選ばれた児童生徒に表彰状を授与すると共に、協賛者から副賞が贈られ、同会場でスクリーンを使用した作品紹介と、選評発表会が催された。式へは入賞者とその父兄ら、関係者、一般参加者、関係記者など大勢が参加し、入賞者に惜しめない拍手を送り、一点一点の選評に聞き入っていた。

今回は残念ながら大賞に該当する作品は選出されなかったが、小・中・高のいずれの作品においても、例年にひけをとらない目を見張る作品が多かった。特に昔の写真に写る幼少期の実兄を題材に油彩で描かれた「86年パチリ」（優秀賞：鼎ヶ浦高等学校1年 梶原由佳里さん）は写実的で絵の具の発色も良く好感が持てる絵に仕上がっており、観覧者からも賛辞の声が多く寄せられた。



「86年パチリ」梶原由佳里さん



「威風堂々」吉田和也くん

また、地域を流れる川の様子を鋭い観察眼で描いた「威風堂々」（気仙沼小学校6年吉田和也くん）が印象的であった。川沿いの町や、畑の様子など細部にわたってしっかりと描かれ、電柱の遠近が深い奥行きを感じさせる。さらにトンビ、サギ、ウミネコなどの多種に及ぶ鳥類が俯瞰気味に描かれた画面中を飛び交っており、海と山が同居するリアス式海岸を有する当地独特の風景を的確に描写している。

（2）地域との連携について

学校週5日制へと移行してから、美術・図工時間数の減少による美術離れが懸念され小・中学校、高等学校と美術館との連携が強く望まれて来たが、当館では施設利用拡大・連携強化のために様々な努力を行っている。休日を利用した地域施設の利用を目的に創設された無料入館券「フリーパスポート」、創作活動を通じて技術指導と美術に関する講話を行う小学校教員を対象にした「美術研修会」、限られた美術時数の中、美術館学芸員が学校に赴き鑑賞教育を行う「出前授業」等々。その中でも、地元学校美術関係者の協力の下、毎年継続開催している「みんなの展覧会をつくろう」展は明確な趣旨を提示し、教員の負担を最大限に少なくした共同企画として他の地域でも数少ない事業であろう。本展が学校教員の年間スケジュールに入っていることで、年一度は必ず学校と美術館が連携して展覧会を行うことになる。一体化ではなく、後にも先にもない単発の企画でもない、恒常的な連携を無理なく継続する目的においてその意味合いは大きい。本展がこれからますます地元学校と美術館を結びつける大きな柱としての役目を担い、その存在が美術教育を支える上で重要な意味を持っていくことと信じる。

市町村合併による対象地域の規模縮小（津山町の広域脱退）となる前の最後の「みんなの展覧会をつくろう」展であったが、17年度以降も引き続き1市4町（10月以降に更に変化予定）の広域地域へ積極的に本展の趣旨理解を求め、作品応募案内を行う予定である。

（３）成果物について

本展では毎回、入賞者作品の図版を掲載したカレンダーを作成しているが、今回から入賞作品1点1点について入賞に関する選評を記載することとした。技術向上の手助けと制作時のアドバイス（参考）とが主な目的である。これは、入賞者表彰式に続く選評発表会では当館学芸員が作品について解説をするが、多くの人にはその内容が明らかにはされていなかったため、カレンダーへの記載は好評を得ている。次回からは展示室の入賞作品へも解説パネルを添えて展示する予定である。

（４）参加者の反応

１．作品応募について

今回で節目の10回目を迎えたが、小・中・高あわせて前回第9回の応募数に比べ110点多い384点もの作品が集まった。特に中学生部門では前回2校・4点の応募が6校・34点と大幅に増加している。これは募集期間に同一内容の案内を時期をずらし、2度送付したことによるものと思われる。作品応募は学校を通じて行われる。教員の意識の上では応募の意向を抱えつつも、他の活動や行事でタイミングを逃すことが多々あるようである。今回はその状況を打破すべく、部活動や文化祭行事等をなるべく避け、案内を送付した。

第3回展で記録した過去最高の約670点の応募以降、数が年々減少していたが、今回は昨年度より大幅に増加した。今後も出品点数が増えていくよう電子化案内の模索やポスターやチラシのデザイン変更、展示風景写真の公開などの対策を練りたい。

２．観覧者について

観覧者数も応募数同様、昨年よりも110人増加し、1,296人となった。毎週末ともなれば展示室は多くの家族連れで賑わい、目当ての作品を探し当てては歓喜の声を上げていた。昨年度同様、出品者の家族宛てに案内状を送ったことにより、会場には本人と父兄や祖父母と一緒に作品を見に来ていたようだ。今回より制作している年度カレンダーに入賞作品に対する選評を掲載したため、その選評と作品を見比べている姿も見受けられた。

展覧会会期中にはアンケートを実施し、観覧者から直接意見を聞くことが出来た。そのほとんどが、この企画に対する賛辞であったが、展覧会の質の問題や会場の構成についての意見もあった。「子供たちの絵のすごさに圧倒されました。(50代男性)」 「多くの学校のすばらしい絵が一カ所で見れてよいと思う。(40代女性)」、「絵からパワーをもらいました。(60代男性)」、「何か物足りなさを感じた。(20代男性)」 「会場を一つにまとめてほしい。(30代女性)」など(一部抜粋)

普段は、なかなか美術館に来る機会がなく、この展覧会により初めて美術館に来たというお客様も少なくない。こどもたちが美術に理解を深めることのほかに、幅広い年齢層に美術館を認知してもらえたことと思う。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

本展は回数を重ねるごとに確実に多くの方々に深く認知され、当館としては完全に定着した企画となった。進級すれば年を追うごとに学年も変わり、進学すれば画題も変わるため児童・生徒にとっては応募機会の多い絵画公募展として存在しているようである。しかし、学校教員を介する企画であるため、教員の意識一つで制作案内告知や応募などが大きく左右される。教員にとっては、毎年同じ単一な企画のように捉えられる恐れがあることも忘れてはならない。だが、芸術拠点形成事業である旨を通知し、バックアップを受けていることを伝達することで、より理解が得られやすいということが現実としてあったようだ。

本展は当館の企画事業として開催しているが、共催事業として、「市立小中学校図工展」「ユネスコ絵画展」「養護学校展」「小中学校書初め展」などを例年開催している。このような児童生徒を対象とした展覧会は、集客力があり、同時開催している展覧会等への影響も大きい。今年度は、高校生の美術展等への会場提供も予定されている。本展はこうした児童生徒対象の事業として、その先駆けとなっている。

今回、10回目というひとつの節目を迎えたわけであるが、この節目に過去の入賞作品を解説パネルを付記して再展示し、開館当時から毎年継続した10年という年月を顧みる企画を開催し、同時に今後の新たな展開を模索している。可能な限り、本展が継続されてゆくことを切に願う。